part 1

農林中央金庫って
どう見える?

いまあらためて存在意義を考える

Why you need THE Norinchukin Bank

Special Talk

巻頭企画

01 プロフェッショナルの視点

日本の農業 その成長の鍵とは？

昨年、熊本を襲った大きな地震。東京育ちながら 1985 年に熊本で就農し、
イチゴを中心とした総合観光農園「木之内農園」を営んできた木之内均さんも、
大きな被害を受けたひとりです。震災からの再起に励みつつ、長年取り組んできた農園での
若手就農者育成も続ける木之内さんと、そこで学び独立を果たした井野千晶さんを、
農業政策に詳しいジャーナリストの石井勇人さんが阿蘇の農園に訪ねました。
そこで語られた、日本の農業の抱える課題、そして農林中央金庫への要望とは──。

石井勇人×井野千晶×木之内均

共同通信社編集委員兼論説委員　若手就農者　木之内農園代表取締役会長

地震で知った自然に逆らう怖さ

石井　昨年の熊本地震では大変な被害を受けたと伺いました。お見舞い申し上げます。

木之内　経営の柱であるイチゴ畑がハウスの骨組みだけを残して壊滅状態となりました。その後、梅雨の集中豪雨で地盤が完全に崩落し、畑の7、8割を失いました。

石井　飛行機から見ると、田植えの時期なのに水を張っていないところがはっきりとわかりました。木之内農園のイチゴ畑は、崩落した阿蘇大橋のすぐ近くの立野（たての）地区ですね。

木之内　阿蘇大橋は水源地から立野まで農業用水を通していましたから、同じ場所で再開するには少なくとも数年はかかると思います。

石井　大打撃ですね。

木之内　今回、実感したのですが、ハウス物など自然に手を加える作物ほど被害が大きいのです。ジャガイモなど畑作物は、収穫量こそ減りましたが、雨水を活用するなど自然と折り合いながら育つ。自然に逆らうことの根源的な怖さを感じました。

井野　私が手掛けているトマトも全滅でした。せめて収穫だけはしようと思ったのですが、水がないためにすでに枯れていました。

石井　それにしても、まさか熊本で。

木之内　私は東京（町田市）育ちですから、地震はいつも経験していましたが、地震が少ないと言われてきた九州・熊本で被災するとは正直、思ってもいませんでした。これまで何度も被災地の苦境を見聞きしていましたが、今回のことで、それらがどこか他人事であったことを反省するとともに、日本が災害列島であることを強く再認識させられました。同時に、震災後、今日まで、ボランティアの皆さんが継続的に協力してくださっていて、日本人のやさしさも身に染みました。

土砂崩れによって阿蘇大橋が崩落したため、分断されたままの立野地区

石井　災害を含めて、自然は侮れません。農業経営にとってとても大きな不確実性だと思います。木之内さんは経営上どのように対応されてきましたか。

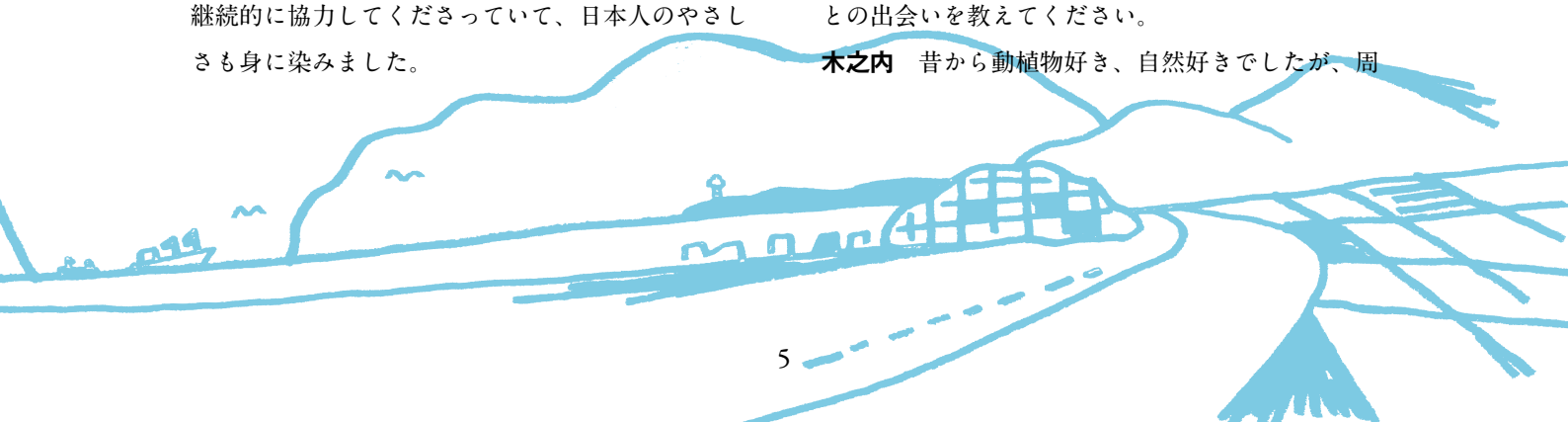
木之内　かねがね農業で成長していくためには、土地を広げて収穫量を上げつつ天候リスクを最小限にとどめることが必要と考えていました。そこで、ご縁があって山口県にある農業法人の株式会社花の海に出資するとともに経営にも参画して、イチゴ生産に関わる木之内農園の人材や技術を提供してきました。おかげで、地震後は向こうから応援をいただいたり、一時的に木之内農園の社員を預かってもらったりと、何とかリスク分散ができてこの窮地でも事業を継続できたと思っています。

石井　今のお話に象徴されるように、木之内さんの取組みは農業をビジネスとして捉えて事業展開されているのが大きな特長だと思います。そうした発想がどこから来たのか、お尋ねしたいと思います。

農業への覚悟を問うため南米へ

石井　都会で育った木之内さんの、そもそもの農業との出会いを教えてください。

木之内　昔から動植物好き、自然好きでしたが、周



囲の山は削られ、自然破壊がどんどん進んでいきました。そこに抵抗を感じるなかで、自然環境や大地に寄り添いながら自分の手で作物をつくる農業という仕事に強く憧れを抱くようになりました。

石井　井野さんの農業への関わりは何から始まったんでしょうか。

井野　高校の時、福岡出身の医師で、途上国で井戸をつくった中村哲さんの仕事を知ったんです。それをきっかけに自然を活用して世界の人々を豊かにする仕事への漠然とした憧れが芽生えて……、いろいろ考えた末に農業という仕事を選択しました。

石井　中村さんは、パキスタンやアフガニスタンで医療活動や用水路の整備に取り組んできました。木之内さんも井野さんも、世代は違っていても大地に対する思いは共通していますね。ではそこから職業として農業を選んだ経緯を教えてください。

木之内　1980年に九州東海大学の農学部に入りました。そこで実習とは別に農家の手伝いを始め、その速さと美しさに感銘を受け、本格的にやりたいという思いが強まりました。手作業なんですが、畝(うね)はまっすぐに立つ。苗を植えても測ったような美しさで、作業がとにかく速かった。

石井　プロの技は美しいと。海外でも多くの経験をされていますね。

木之内　はい、南米に行くことにしたのは、向こうで農業を経験した教授から話を聞いたことがきっかけでした。言葉も違う、文化も違う、しかも当時は日本人への差別が激しく、貧困を原因とした犯罪も多い。そのなかで皆さんものすごく苦労して自立した生活を送っている、と。現地でそうした経験をしながら、おのれの農業への覚悟を問いたかったんです。

石井　その時の周囲の反応はどうでしたか。

木之内　東京の親には大反対されました。「大学出て農業するとは何事か」と。ただ、これは想定内で

したが、農学部のある先生に「お前本気か？」と真顔で言われた時は強烈な怒りを覚えましたね。

石井　南米では日本からの移民が苦労して農場を開拓していたというのに……。海外に行って就農の覚悟は固まりましたか。

木之内　農作業が辛いと思ったことは南米時代を含めてこれまで一度もないんです。やはり土をいじることが根本的に好きなんですね。農業を仕事にすると決意したのは、実はまったく異なる観点からでした。

石井　どういうことでしょう。

木之内　現地の人たちはけっこう貧しい生活を送っていましたが、誰も暗い顔なんかしていない。底抜

けに明るいんですね。それで「なんでだろう」と考えていて、はたと気づいたんです。彼らのそばにはいつも農場や牧場があって、食うのには困らないということなんです。これはかなり根本的なところで生活の安心につながっています。

石井　「食」を巡る暴動は古今東西を問いません。

木之内　その時、日本は危ないと思いましたよ。当時、自動車やコンピュータが日本経済を担う産業として注目されつつありましたが、それで日本が食えるのかと思っていました。一方で、農業には誰も見向きもしません。こんな社会、絶対にいつまでも続かない。農業で自立して日本の根幹的なところを強くしたいと思いました。

石井　日本の将来を思う危機感が原点になったということですね。井野さんはどのような経緯だったのでしょうか。

井野　私は地元の熊本出身で、木之内さんと同じ大学に通いながら木之内農園さんでアルバイトをさせていただきました。そこで農業のやりがいを実感できたことから、卒業後は、知り合いの紹介で長野県の農業法人で約１年間働きました。設立したばかりの法人でしたから、耕作放棄地の整備から収穫まで携わることができ、露地物のキュウリやネギ、ハウスでのシイタケやキノコなどの栽培技術を学びました。去年の春に地元に帰ってきて、土地を借りて独立したというわけです。

木之内　女性の場合、実はここまで来るのが大変なんです。今の時代でもやっぱり「女性なのになぜ？」という声はあちこちから飛んできます。ですから、土地を借りようとしてもなかなか相手にしてくれないのが現実ですし、土地を貸す人も「女性に貸してどうする」みたいなことを周囲に言われます。そんな話は今でもそこらじゅうにあります。

石井　そういうハードルを越えて今がある、ということですね。木之内さんは「大学を出てなぜ農業を」、井野さんは「女性なのになぜ農業を」という周囲の無理解と闘ってきた。相当の覚悟を持って就農したという共通点がありますね。

補助金ありきで始めると

石井　次に、実際の就農にあたってのお話を伺いたいと思います。木之内さんは大学卒業後、南阿蘇に残って独立を目指したと伺いました。土地や資機材を購入する資金はどうされたんでしょうか。

木之内　当時は今と違って役場も農協も新卒の就農希望者なんてまったく想定していませんでした。当

木之内農園が運営する、阿蘇市の複合観光施設「はな阿蘇美」

然ながら融資枠もなく、率直に言って相手にされませんでした。就農者にとって大学の卒業証書なんて何の価値もないんですよ（笑）。村長からは「大卒の職員がいないから役場に来い」と言われましたし、地元の人からは「地上げ屋？」という目で見られる。なかには親切な職員もいて「そんなにやりたいなら農家の養子に入れ」とアドバイスを頂戴しました（笑）。今となっては笑い話ですが、当時は農学部を出て農業を志す自分となぜきちんと向かい合ってくれないんだ、というやるせない思いで一杯でした。ただ、その時の「今に見ておけ。将来必ず一目置かれるような農業をしてみせる」という思いは、間違いなく今の農業法人につながっていると思っています。

石井　逆境をバネにしたのですね。

木之内　ひとまず知り合いの農家の手伝いをして、経験値だけは高めておくことにしました。当然、無報酬ですから、夜は自動車の鋳物部品をつくる会社でアルバイトをしてお金を貯めました。

石井　新規就農者のための補助制度がある今とは隔世の感がありますね。

木之内　補助金については２つの面があると思います。確かに、農業を成長産業と位置づけて就農人口を増やそうとしている今、新規就農者にとって 100 万円単位のお金というのは「挑戦してみよう」と思わせる金額だと思います。ただし、補助金ありきで始めた人は、折れる人が多いというのが実感です。ひがみではありませんが、私たちのような時代に就農した人間は、無一文から始めて苦労はしましたがみんな長く続けています。

石井　井野さんはどうしているんですか。

井野　私はちょうど今、地元の農協を通じて新規就農者向け融資を申し込んでいて、補助金制度の受益者なんですが、それでも最初の一歩は自分の貯金や親の援助を使ってハウスを建てました。

石井　それはなぜですか。

井野　とてもありがたい制度なんですが、就農したからお金がもらえるというのは、やはりちょっと違うかなという思いがありました。

木之内　ニンジンを前にしても、我々は人間だ（笑）。

井野　木之内さんからは常に「補助金は貯金だと思え」と指導されてきました。私も同感で、ニンジンだけ見ている人は絶対に失敗すると思います（笑）。

石井　農林水産省の農業次世代人材投資事業は非常に手厚いです。就農準備の２年間と経営開始後５年間、最大年間 150 万円交付されますが、金額が大きければよいというわけでもないということですね。

井野さんの営むトマト畑。「シシリアンルージュ」という品種を栽培している

制度の設計や運用面で改善の余地があるでしょうね。

木之内　就農して2、3年、実績を積んだ人間が融資の対象となるような制度があってもいいと思います。ここはぜひ農政として議論していただきたいですね。

人のつながりがあったからこそ

石井　資金とともに必要となるのが土地や資機材ですが、お二人はどのように調達されたんですか。

木之内　1985年に手伝いをしていた農家の方から運よく転作田を借りることができました。ただ、面積が狭かったため、稲作は無理でした。コメは補助金がないと成り立たないことを知っていましたし、コメの採算が取れる広くて優良な土地は地元の農家が決して手放しませんでしたからね。

石井　それで最初からハウスで始めた。

木之内　農業で自立することを目指していましたから、土地が狭くても収益が見込めるハウス物……、なかでも当時誰もやっていなかったイチゴ栽培に注力することにしました。基本的に自然の法則に反するハウス物は好きじゃないんですが（笑）。

石井　自立するために、というのは木之内さんらしい選択ですね。機械とかはどうされたのですか。

木之内　これも知り合いの農家の方が、空いている時に使っていいよと貸してくれました。よく「なぜ阿蘇に」と聞かれるんですが、人のつながりがある阿蘇でしか始められなかった、というのが正直なところですね。

石井　そういう日々のつきあいを重ねるなかで農業者として認められたんですね。井野さんはどうでしょうか。

木之内　井野さんは地元だから最初からサポーターがたくさんいるんですよ。

井野　いろいろな方から声をかけられます。そういう意味では得していると思います。土地も祖母の知り合いから借りることができましたし。ただ、いろいろなアドバイスをいただくなかで戸惑うこともあります。皆さんおっしゃることが違うので（笑）。

石井　どう対応されているんですか。

井野　基本的には、自分の考えを貫くことにしています。例えばハウスの向きは、風の通り道を考えて、とか。こうした試行錯誤も農業には必要だと考えていますので。

石井　なるほど。木之内農園の門下生ならではの強い意志を感じますね。

「人」をどう育成していくか

石井　さきほど木之内さんが、優良な土地は地元の農家が手放さないから、条件の悪い土地しか手当てできなかったというお話をされました。そこでお伺いしたいのですが、親元で就農している同世代、つまり最初から競争条件の異なる同業者に対してはどんな思いを抱いていましたか。

木之内　同世代でも後を継ぐ人の数は減っていましたから、ある意味、仲間だと思っていました。自分はお金もなく、よそ者を自覚していましたから、最

初から優良な土地が手に入るとは思っていませんでした。ただし、そうした格差を正そうとしない農政というか、社会に対してはどこかおかしいと思っていました。ちょうどその頃、全国から農業関係者が集まる会議に参加したことがあるんですが、みんな口をそろえて「後継者がいない」と言っていました。そこで思わず手を挙げて「農業をやりたい人間はここにいる。その一方で、農地法でも委員会活動でも我々のようなよそ者を受け入れようとしないのはなぜなのか。根本的なところで改善が必要ではないか？」と言ったことがあります。

石井　まさに面目躍如のエピソードですね。ただ、その後は農家の高齢化と減少が差し迫った問題となったことから、政府は農地の集積を促すための制度や、農業経営の法人化を促す政策に着手しています。お金や土地の手当は以前よりは楽になったのではないでしょうか。

木之内　それは間違いなく言えますね。特にこの3年ぐらいは土地が集まり始めたと実感しています。これは、農業の担い手の断絶が背景にあると思っています。つまり、我々より上の団塊の世代の人たちは手作業を含めた農業を知っていて、我々の世代は高校ぐらいまでは親の手伝いで手作業だけでなく機械を使った農業を経験しています。ところが、今の30代から40代の孫世代になると、若くして都会に出るなどしてほとんど農業の経験がなく、自分の家の田畑の場所を知らない人もいるほどです。

石井　高齢化しながらも集落を支えてきた兼業農家の持続が難しくなってきた。

木之内　はい。ですから今の日本の農業の最大の課

木之内農園の「夢みる苺ジャム」

「夢みる苺ジャム」は旧木之内農園の加工場を活用して製造されています

「はな阿蘇美　観光いちご園」のハウス内

題は、「人」をどう確保し、育成するかということだと思います。

石井　だからこそ木之内さんは、ＮＰＯ法人「阿蘇エコファーマーズセンター」の理事長として、経営感覚を持った農業者（エコファーマー）を育成しつつ、大学でも教鞭をとられているんですね。

木之内　人を増やしていく上ではまず数の問題をクリアし、次に質を高めていく必要があると思っています。ただ「やりたい人」と「できる人」は別問題だと思います。

石井　さきほど補助金に二面性があると指摘いただいたことと重なる部分だと思います。補助金があるがゆえに就農者が増える、けれど一部の人たちは「なぜ農業をやるのか」ということを突き詰めないうちに始めてしまうがゆえに続かない……。量が質につながっていかないという問題があると思います。

木之内　そこで問題になるのが農政でしょうね。専業農家の大規模化、法人化を促すだけでなく、兼業農家が過半を占める地域農業の担い手をいかに維持・存続させていくか、一方で新規就農者の支援も必要といった情勢のなかで、十把一絡げの政策では本当の意味で農業が強くならないと思います。小さな農業もあっていいんですよ。そうじゃなきゃ、棚田なんか守れないわけですから。

石井　多様性を尊重しながら手厚い支援と自立を促す支援のバランスをいかにとっていくか。農政に限らず考えていかなければならない問題です。

消費者志向の農業を目指せ

石井　このあたりで、あらためて新規就農者に対するメッセージを頂戴したいと思います。

木之内　大学で教えている学生にも言っているのですが、ビジネスとしてやるからには、消費者志向の農業を目指してほしいと思います。私はかつて、1988年頃でしたか、全国から農業経営者が集まる会議に参加したことがあります。他の部会は政策や技術論争でしたが、観光農園部会だけは唯一、「お客様に満足いただくためには何を成すべきか」という視点から議論をしていて大きな衝撃を受けました。

石井　そうした経験がイチゴ農園の観光農園化や、ジャムの販売など農業の生産を加工（2次産業）や流通（3次産業）と組み合わせて付加価値を高める6次産業化につながっていったんですね。

木之内　直接的な動機は、妻と従業員の3名だけではイチゴを収穫しきれないから、イチゴを見に来たお客様に収穫して食べてもらおうという単純な動機でした（笑）。けれど、その底流には、消費者に喜んでもらえる農業をしようという思いがあったのは確かです。

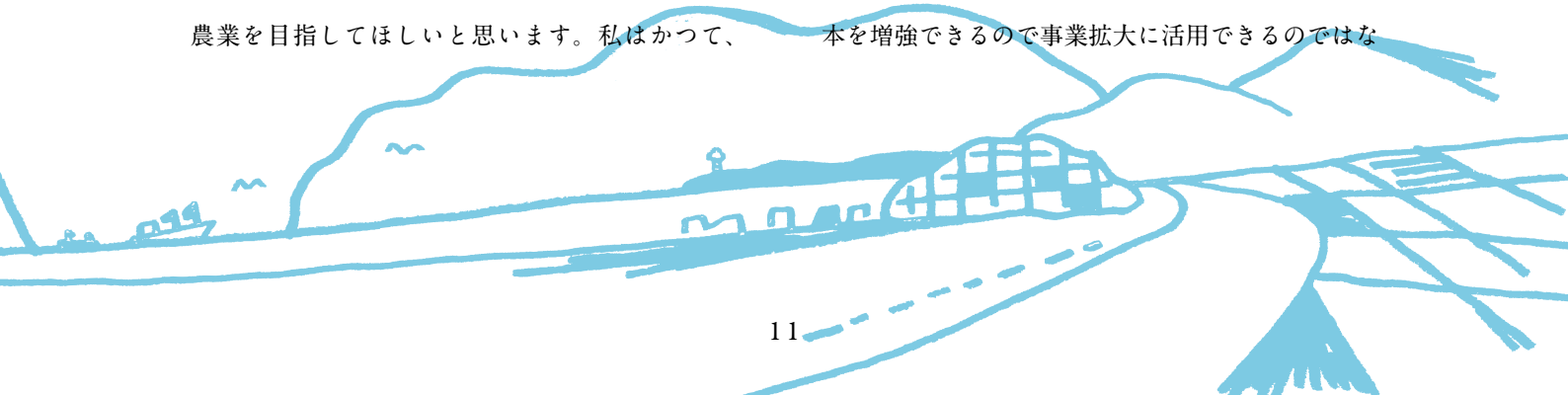
石井　そんな木之内さんを見て、井野さんはどんなアプローチをされていますか。

井野　私が手掛けているイタリアントマトは加工用のトマトで、火を通してソースにするとおいしいんです。海外からの輸入品が多いのですが、それを国内でつくって新鮮なうちに加工してもらえれば安くておいしいトマトソースができるんじゃないかと……。隙間産業的なアプローチですね（笑）。

木之内　彼女の偉いところは、付加価値の高いトマトの販路を自ら開拓しているところなんです。

井野　知り合いのバイヤーを通じてレストランなどに卸しています。

石井　付加価値をきちんと理解してもらえる売り先を自ら確保しているということですね。一方で、さきほど農協を通じて新たな融資を申し込んでいると伺いましたが、ＪＡグループは日本政策金融公庫とともに設立したアグリビジネス投資育成と連携して、農業生産法人に積極的な投資をしています。自己資本を増強できるので事業拡大に活用できるのではな



いでしょうか。

井野　実は今度ソバージュ栽培……ソバージュとは野性的という意味の露地物ですが……、それを始めようと考えていますので、ぜひＪＡグループさんから投資を提案してほしいですね（笑）。いずれにしても、これは木之内さんの教えでもあるんですが、農業は土づくりから始まり、天候リスクなども含めて一足飛びの成長はできない地道な産業だと自覚していますので、コツコツと、ですね。

木之内　コツコツやるのと同時に、就農して２～３年で1,000万円の売上を目指せと指導しています。矛盾しているようですが、やはり1,000万円ぐらいの収穫規模がないと工夫のしようがありませんし、将来への再投資もできませんからね。

石井　工夫や再投資の余地としての1,000万円を目指せということですね。

農林中金はもっと農業を知ってほしい

石井　文字通りゼロから農業を始め、ご苦労の末ここまでの経営に育て上げてきた木之内さんが、日本の農業の将来についてお持ちになっている問題意識について教えてください。

木之内　いろいろありますが、大きな問題意識としては、日本の持続可能な農業がどうあるべきかという議論が必要だと思っています。観点の１つは、欧州のように、農業立国という側面を明確に打ち出して日本の食の価値を高めていくこと、平たく言えば食品価格を欧州並みに高めていくことが必要ではないかと考えています。２つ目は、日本の農業を成長産業として位置づけることそれ自体はよいとして、融資を増やしてハイテク産業やソフト産業のように大型化するだけでは収益率は高まらないのではないか、日本の農業独自のビジネスモデルが必要ではないかと考えています。

石井　農業は自然災害など独特のリスクがありますし、他の産業のように「規模の経済」「範囲の経済」が成り立たないケースがありますからね。さまざまな企業が農業に関心を寄せていますが、その焦点はビジネスとして成立するのかという点です。その意味で、農産物のバリューチェーンの構築は持続可能な農業を実現できるか否かという点で重要ですね。最後に、農業金融の現状についての受け止めは、いかがですか。

木之内　そうですね、農業金融という面からは、融資を受ける側が本音で話していないと思う時があります。農業経営者として、金融面から農業を助けてくれるのは大変ありがたいことです。ただし、農業経営者はお金を出してほしいから、上手にものを言っている。そうした甘い経営計画を額面通りに受け止めていてはダメです。一方で、融資する側、特に農林中金さんは金融のプロであることには間違いないんですが、本当のところで農業をわかってないなと思うことがあります。もちろん、農業をやったことがない、そこに住んだこともない人が農林中金さんに入ってすぐにプロの目利きになれるわけがないことは百も承知です。けれど、農協系金融機関としての役割を強めていくのであれば、もっと農家や農業、農業経営の実情を勉強してほしいですね。いろいろな企業がこの業界に参入してきていますが、残念ながら、そんなに経営がいいところなんてあまりないですよ。現実はそんな甘いもんじゃないです。だからこそ、農林中金さんには、ビジネス的に見て実態が見えていない相手に無理してお金をつぎ込むのではなく、多少時間がかかっても真剣に儲かる農業を農業経営者と一緒に考えながらコミットしてほしいと思います。

石井　食農ビジネスを立ち上げるなど、農業分野への関与を高めようとしている今だからこそ、真剣に

木之内均（きのうち ひとし）
1961年、神奈川県生まれ。九州東海大学農学部卒業。非農家出身で、阿蘇におけるイチゴ栽培の先駆者。西日本最大級の干拓地の大規模農園（株）花の海の立上げから運営に参加。ＮＰＯ法人阿蘇エコファーマーズセンターを設立、理事長就任。前熊本県教育委員会委員長。現在、東海大学専任教授。著書に『大地への夢―都会っ子農業に挑む』。

石井勇人（いしい はやと）
1958年、岐阜県生まれ。東京大学文学部卒業、一般社団法人共同通信社入社。ワシントン駐在、経済部次長などを経て、現在、共同通信社編集委員兼論説委員。著書に『農業超大国アメリカの戦略』など。共訳に『通商戦士：米通商代表部（ＵＳＴＲ）の世界戦略』。

井野千晶（いの ちあき）
1992年、熊本県生まれ。東海大学農学部卒業。在学中、木之内農園でアルバイトを行う。卒業後、長野県の農業法人で経験を積み、2016年熊本県阿蘇市で独立。地元のネットワークを通じて販路を拡大。「消費者が安心して口にでき、おいしく高品質」をモットーに、外来品種トマトを中心に栽培。将来は自らの経験を受け継ぐ人材育成を目指す。

個々の農業者と向かい合うべきということですね。もう１つ、マスコミの論調という観点からは、国際金融市場で巨額の資金を運用する機関投資家としての振る舞いは農業金融本来の姿ではない、という声もあります。

木之内　債券や株式など有価証券の投資運用益を農協や組合員に還元する姿勢に批判があります。また、運用益を追求する姿勢は一部の生産者からも批判がありますが、私は、投資事業は農協がそれぞれの地域で営農・生活指導事業を維持するためには不可欠な活動だと思っています。その意味で、運用がけしからんと決めつけるのは間違っていると思いますし、運用益が生産者の益に適った事業に通じていることを農林中金さんはもっと強くアピールすべきだと思います。

石井　運用益は、系統組織を通じて利息や配当といった収益の還元ということだけではなく、様々な情報やサービスといった形となって農家に還元されていますからね。本日はお忙しいなか、有益なご意見、ご指摘をいただき、ありがとうございました。